「日本インターナショナル建築会」における香野雄吉の活動と 建築理念について

A STUDY ON WORKS, ACTIVITIES AND ARCHITECTURAL IDEAS OF YUKICHI KOHNO IN 'THE INTERNATIONAL ARCHITECTURAL ASSOCIATION OF JAPAN'

笠原 一人*

Kazuto KASAHARA

This Paper examine the works and activities of Yukichi Kouno (Ryouichi Kanou) within the movement of 'The International Architectural Association of Japan' founded in 1927. Kohno became a member of 'The Association' around January 1932. It was at the turning point for the activity of 'the Association' and the enrollment of Kohno was a part of it. He worked on the edition of the periodical of 'the Association' and introduced the architecture of Soviet Union and tried to advocate the new architecture by a method of the social science. Since he has involved in 'the Association', the group converted to aim the new architecture by a method of the social science based on the theory of communism. 'The Association' stopped their activities in May 1933. He seemed to have already left the Association before May 1933. His withdrawal from the Association seems to be one of the causes of the demise of the Association

Keywords : *The International Architectural Association of Japan, Yukichi Kouno, Ryouichi Kanou, Soviet Union, Movie*

日本インターナショナル建築会, 香野雄吉, 加納龍一, ソ連, 映画

1. はじめに

本稿は、1932 年頃に「日本インターナショナル建築会」（以下、「建築会」と略す）の会員であった香野雄吉の「建築会」における活動とその役割を明らかにし、また香野の活動を通じて「建築会」の活動の最後の状況を明らかにしようとするものである。

香野については、これまでもいくつかの言及や研究がある。例えば建築評論家の川添登は、1950 年代末に香野について論じている。香野が 1920 年代に日本の伝統的な木造建築に国際的なものを見出そうとしたことを評価したものである¹⁾。また映画史研究者の牧野守は、1970 年代末より、香野雄吉の映画や建築に関する活動を掘り起こした²⁾。さらに近年では、近代建築研究者の佐々木宏が、香野の履歴や建築界での足跡とともに、ル・コルビュジエを評価した人物として紹介している³⁾。

しかし、いずれの言及や研究も、香野が「建築会」会員として活動したことについては全く触れておらず、むしろ香野が「建築会」と異なる理念を持っていたと位置づけている⁴⁾。従来の香野についての言及や研究は、本稿が明らかにするような、香野が「建築会」の理念を共有し最後期に会員として「建築会」に在籍したこと、ま

た「建築会」の活動の変化や終焉に影響をもたらしたことを理解していなかったためと見られる。

「建築会」の活動に関しては、「建築会」の設立や宣言文のことはしばしば論じられてきたが、どのような変化を経てどのように活動を終えたのかについては、明らかにされていない。香野の「建築会」での活動の様子を明らかにすることは、香野が「建築会」の理念をいかに共有し、どのような役割を果たしたか、また香野が「建築会」の活動の変化や終焉にどのような影響をもたらしたかなどを明らかにすることになり、「建築会」の実態を解明することにもなる。

なお、香野は本名を加納龍一^{かのうりゅういち}という。しかし「建築会」活動中の建築に関する論考は、すべて香野の名で執筆している。したがって、本稿でも本名ではなく香野の名で論じることとする。

2. 「建築会」入会まで

まず、香野の「建築会」への入会までの履歴とともに（表 1）、香野が「建築会」に入会するまでの活動や関心に触れておく。

香野は、1904 年に神戸で誕生している。明治初期に神戸の中心市街地の開発に大きな功績を残し、今も神戸の中心部の町名「加納町」

本稿は、2007 年の日本建築学会近畿支部研究報告発表会での発表をもとに、その後の知見や情報を加筆、修正したものである。

* 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科 助教・博士(学術) Assistant Prof., Dept. of Architecture and Design, Kyoto Institute of Technology, Ph. D.

にその名を残す加納宗七は、香野の祖父に当たる。香野は、1925年に京都帝国大学の建築科に入学する。入学後の香野は、学生時代を通じて親しい友人となる清水光らとともに、1925年7月に創刊された映画評論雑誌『映画随筆』の編集に参加した。実質的には、香野と清水の二人が編集していたという⁹⁾。ちょうどこの頃から、香野は香野雄吉の名で執筆活動を行うようになる。香野らが編集した『映画随筆』には、パウハウスで映画や写真理論を先導したモホリ・ナギーの紹介や論考の翻訳、またソ連の映画や映画論、そして京都を拠点に活動し当時ソ連とドイツへ留学中であった映画監督衣笠貞之助の作品論や、衣笠からの洋行便りなどが掲載されている⁷⁾。また、1930年6月に伊藤静三らが中心となって京都で創刊された『映画芸術』や、その後継誌として1931年6月にやはり伊藤静三らによって創刊された『映画科学芸術』では、香野はソ連映画を紹介するなどしている。

当時の香野の映画に関する活動は、編集者や翻訳者、また海外の映画の紹介者としての役割が主であった。その際香野は、映画を始めとした「芸術を政治から分つことは出来ない」と論じ、また「理論は又実践から分つことは出来ない」として、ソ連の映画の「正しさ」を強調している⁸⁾。当時のソ連は、共産主義理論に基づく国家の建設を目指して「五ヵ年計画」の最中であり、映画が新しい社会を導く手段として評価されていた。香野の映画への関心は、共産主義理論を背景としていた。

こうして香野は、映画理論雑誌の編集に関わることを通じて、映画への関心と実践を一層深めていく。香野は、当時のことを振り返った論考の中で、「清水（光）を通して中井正一らに、ある種の側面的知識を与えたことはまちがいないだろう」と論じている⁹⁾。香野は、いわば当時の映画の最先端の理論をリードしていた。

一方、建築についてはどうか。香野は、大学の建築学科での講義には関心が持てなかったようで、代わりに哲学や美学、美術史の講義の聴講に出かけたり¹⁰⁾、書店でル・コルビュジエのドイツ語訳の『建築をめざして』を見つけて読んだりしていたという¹¹⁾。大学時代の活動の中心が映画だったことから、香野の建築の理論や知識は、映画などの他分野との関係の中から、そして最新のヨーロッパの書籍などを通じて、独自に得られたと見られる。

その後、香野は大学を中退し¹²⁾、松竹京都撮影所の設計部に勤務する。この撮影所勤務中には、衣笠貞之助監督の名作『忠臣蔵』(1932年)や『雪之丞変化』(1935～36年)、冬島泰三監督の『かごや判官』(1935年)、犬塚稔監督の『元禄快挙余譚 土屋主税』(1937年)で「設計」を担当している¹³⁾。これらの映画のセットは、伝統的な木造の町屋のような意匠である。香野がこの意匠の「設計」にどの程度関わっていたかは明らかではないが、『忠臣蔵』では「舞台意匠」を別の者が担当し、「設計」を香野が担当していることから、松竹京都撮影所設計部勤務時代は、監督や脚本家らのイメージや指示を形にする役割を担っていたと思われる。

香野は、『映画随筆』を発行していた頃から衣笠と親交があった。また衣笠が1928年から1931年にかけてソ連とドイツに滞在した際には、香野は衣笠に日用品や日本で発行された書籍を郵送する代わりに、衣笠にル・コルビュジエやパウハウス、ドイツ工作連盟、タトリンなど建築関係の書籍を購入して郵送してもらっていたようである¹⁴⁾。当時の香野は、衣笠との交友関係により、ヨーロッパやソ

表1 香野雄吉（加納龍一）略年譜⁵⁾

西暦	和暦	事項
1904	明治 37	神戸市暮合区小野柄通 5-1 にて、加納龍一として誕生（父：加納宗五郎、母：かね）
1921	大正 10	神戸第一中学校卒業
1925	大正 14	第三高等学校卒業 京都帝国大学建築科入学
1926	大正 15	『映画随筆』創刊（香野雄吉の名で活動開始）
		この間、京都帝国大学中退
1930	昭和 5	松竹京都撮影所設計部勤務 『現代住宅建築論』発行
1932	昭和 7	1 月 「ソヴェートの友の会京都支部」設立（「幹事」に就任） 1 月頃 「日本インターナショナル建築会」入会 大島きくと結婚 映画『忠臣蔵』（監督：衣笠貞之助）設計担当
1933	昭和 8	「日本インターナショナル建築会」活動停止 6 月 検挙される
1934	昭和 9	2 月 釈放される（執行猶予）
1935	昭和 10	松竹京都撮影所製作部次長就任 映画『雪之丞変化』（第一篇・第二篇、監督：衣笠貞之助）設計担当（1936 年発表、解決篇でも担当） 映画『かごや判官』（監督：冬島泰三）設計担当
1937	昭和 12	映画『元禄快挙余譚 土屋主税』（監督：犬塚稔）設計担当
1939	昭和 14	6 月 上京し東宝計画部勤務（以降香野名使わず） 12 月 第二製作部（文化映画担当）勤務
1940	昭和 15	映画『貝塚』、『砂丘』、『室生寺』、『二条城』、『集団検診』、『農村住宅改善』（企画製作：加納龍一）発表
1941	昭和 16	11 月 東宝第二製作部が日本映画社に統合される
1942	昭和 17	映画『法隆寺』（企画製作：加納龍一）発表
1943	昭和 18	日本映画社製作部次長就任
1946	昭和 21	映画『原爆の記録』（プロデューサー：加納龍一ほか）発表 日本映画社専務就任 日本映画教育協会設立に参加
1949	昭和 24	日本映画社教育映画部が朝日文化賞（現・朝日賞）受賞
1954	昭和 29	映画『日本の稲作』（脚本：加納龍一）発表
1956	昭和 31	映画『雪国の生活』（構成：加納龍一）発表
1957	昭和 32	映画『起ち上るアジア』（脚本監督：加納龍一）発表
1971	昭和 46	映画『ヒロシマ・原爆の記録』（プロデュース：加納龍一）発表
1988	昭和 63	死去

連の最新の映画や建築の情報を得ていたのであった。

3. 香野雄吉の建築理念

大学入学と同時に映画に没頭する香野だったが、次第に建築の評論も執筆するようになる。香野が著した建築に関する最初の論考は、岩波書店が発行する雑誌『思想』の1929年4月号に掲載された「映画と建築」である。当時『思想』は、和辻哲郎、谷川徹三、林達夫が編集を手がけていた。1929年の年頭に、香野は林から「何か書いてみないか」という手紙をもらい、執筆の機会を得たという¹⁵⁾。

その後、香野はやはり林の推薦によって『思想』誌上に建築の論考を執筆し¹⁶⁾、また同じ岩波書店の『哲学小事典』(1930年)では、「映画芸術と現代建築」の項目を担当執筆した¹⁷⁾。さらに、1929年に板垣鷹穂の編集によって創刊された『新興藝術』にも執筆の機

会を得るなど、1929年から1930年の1年足らずのうちに、立て続けに数本の建築評論を発表している¹⁸⁾。そしてこれらの評論は、板垣の紹介により¹⁹⁾、天人社から発行された「新芸術論システム」の1冊として、『現代住宅建築論』（1930年）にまとめられた²⁰⁾。香野にとっての、最初にして最後の建築についての著書である。

香野の建築理念は、どのようなものだったか。『現代住宅建築論』を参照しながら、概要をまとめておく。

香野によれば、近代の建築は、個人的で趣味的なものではなく、機械化され細部まで単一化された類型的で形成的なものである。すなわち工業化され規格化されたものとして作られるものと位置づけられる。また、機械技術や経済組織の構造から必然的に導かれるものであり、正しい機能に応じるという目的的な性格を持つ。それらは映画との共通点であるという²¹⁾。

また、資本主義社会における居住環境の悪化や住宅供給が不十分である一方で、ソ連の建築が優れた建築技術と経済政策の上に成立し、生活や社会との関係を合理化していることを指摘している²²⁾。

さらに、建築は「国際的」なものでなければならないが、そのためには近代技術に基づくことや建築の工業化など、「建築に於ける客観的・事物的なものへの関心」が必然であるとする。だが、地域による条件の違いが、国際化を阻んでいる。この問題を解決するには、例えば日本では、伝統的な「日本建築のこれらの特殊性を『国際的建築』に向かって取り上げること」が必要だという。すなわち「日本建築を、現代建築の立場から見ること」である。その見方によれば、伝統的な日本建築は、「国際的建築」に求められる軽量建築材や可動軽量間仕切り、規格化、さらに空間の開放性などの条件を満たしているという。

香野以前にも、近代の建築家が日本建築を「国際的」なものとして捉えることはあった。だが香野は、従来のものはいずれも階級社会の問題に目を向けていないことが問題だと指摘する。その上で、当時の日本における「階級の対立、生産の無政府状態、独占・支配的帝国主義等」が正しい「国際的建築」を不可能にしており、「建築の事物的・科学的研究」こそが「国際的建築」を可能にするはずであると論じている²³⁾。

このように、香野の建築への関心は、新しい時代と社会にふさわしい工業化や国際化の問題に向けられている。だが工業化や国際化を図るためには、建築に対する徹底した社会科学的な方法、地域的条件下に国際性を読み取ること、また階級社会の問題の解決が必要だというのである。こうした論調には、映画論と同様に共産主義理論の影響が読み取れる。

この『現代住宅建築論』は、当時の建築関係者に少なからぬ影響を与えたようである。例えば西山卯三は、京都帝国大学建築学科の学生時代に「デザム」というグループを設立し、新しい建築のあり方を追求していたが、その活動の一環として『現代住宅建築論』の読書会を開催したという。そして、香野の社会科学的な建築の分析から、理論的な影響を受けたという²⁴⁾。香野は、建築作品は遺していないが、社会科学的な方法による建築理論は、当時一部の建築家らの支持を受けたと見られる。

4. 「建築会」の「改革」と香野の入会

香野が「建築会」の会員となるのは、1932年の1月頃のことである²⁵⁾。入会後は、松竹京都撮影所に勤務しながら「建築会」で活動していたと見られる。香野が「建築会」に入会した理由は定かではない。しかし、香野が「建築会」の代表を務めていた上野伊三郎と親しい関係にあったこと²⁶⁾、また「建築会」の機関誌であった『インターナショナル建築』1931年5月号で香野の『現代住宅建築論』の一部が紹介されているなど²⁷⁾、「建築会」が香野に関心を持っていたことがその理由として考えられる。また香野が「建築会」の会員になる直前、「建築会」では活動上の大きな変化が生じており、このことも香野の入会に大いに関わっていると見られる。大きな変化とは、1932年1月頃に「建築会」において、「会としての今後の社会的な運動及び会の組織についての内容改革」が行われたことである²⁸⁾。この「改革」は「建築会」が1931年10月に開催した第5回建築展覧会終了後に生じたものであり、「改革」によって「機関誌の発行も一時中止のやむなきにいたった」という。実際、「建築会」の月刊の機関誌であった『インターナショナル建築』は、1931年9月に発行された後、同年12月の発行まで間が空いている。そして1932年1月には「新に会の組織並びに構成員の一部を改革し又機関誌の発行の事に関しては今後其の一切を藝苑社より会に移し直管として、日本インターナショナル建築会発行とした」という²⁹⁾。

なぜ「建築会」に「改革」が必要であったのかの理由は定かではない。しかし「建築会」の主宰者上野伊三郎と本野精吾によるソ連への関心の高まりが、背景にあると考えられる。なぜなら、1931年6月に東京で長谷川如是閑を会長とした「ソヴェートの友の会」が設立された後の1932年1月、つまり「建築会」の「改革」と同時期に、京都で「ソヴェートの友の会京都支部」が設立され、香野と上野と本野が京都支部の幹事となっているからである³⁰⁾。

「ソヴェートの友の会京都支部」は、産婦人科医で後に日本安楽死協会を設立した太田典礼を中心に設立されたもので、香野が太田の下で「第一の活動家」だったとされる³¹⁾。この支部の活動は、上野が設計した河原町三条の東洋亭で、1931年12月に「準備会」が開催されたことに始まっている。この会には香野も参加している。その後は毎月のように、上野が設計した出町柳スター食堂などで「例会」を開催した。翌1932年1月に開催された「例会」において、香野と上野と本野、また「滝川事件」で知られる京都帝国大学教授滝川幸辰、さらに映画監督の衣笠貞之助らが同支部の「幹事」に選ばれた。同年3月の「例会」では、香野が「ソヴェート映画」をテーマに講演し、6月には映画「全線」の上映が、香野と交流のあった衣笠貞之助の解説によって行われている。また同年4月から7月にかけてと9月には同会の主催でロシア語講習会も開催されている。翌1933年にも、1月には神戸総領事のゴンチャロフ氏による「五年計画の概要」の講義が行われるなど、活発に活動していた。しかし第2回のロシア語講習会の講師として、後にロシア文学者として知られる湯浅芳子と呼ばうとしたところ、警察の介入によって中止となる。この頃から警察の監視が厳しくなり、1933年4月に予定されていたロシア語講習会は応募者がなく中止となり、同年5月以降、支部の活動は休止に追い込まれたようである。

「建築会」の「改革」は、香野と上野と本野がこの「ソヴェートの友の会京都支部」の「幹事」就任と同時に進行されており、香野の「建築会」への入会の時期にも重なる。香野の「建築会」への入会は、「建築会」の「改革」の一環だったと見られる。

「建築会」の「改革」は、香野と上野と本野がこの「ソヴェートの友の会京都支部」の「幹事」就任と同時に進行されており、香野の「建築会」への入会の時期にも重なる。香野の「建築会」への入会は、「建築会」の「改革」の一環だったと見られる。

香野は、「建築会」の会員になるとすぐさま、『インターナショナル建築』の編集を任せられ、その最初の号となる1932年1-3月号で、「ソヴェートの住宅」を特集している。ソ連の標準化された集合住宅の写真や平面図を掲載し、香野によるソ連の建築家や住宅についての論考や翻訳を掲載しているほか³²⁾、湯浅芳子によるソ連での生活の様子を紹介する論考も掲載している³³⁾。この論考は「ソヴェート友の会京都支部」での湯浅の講演の速記録である。また共産主義者として知られ1930年10月より「建築会」の会員となったフランス人建築家A.リュルサの作品を取り上げ、上野が解説を付している。香野自身も「ソヴェートの建築家」と題した論考を執筆している。その内容は次のようなものである。ソ連の建築には反動的な宣伝や中傷が行われているが、実際には建築が「非常に複雑な社会現象である」うえ、映画や文学などに比べて「プロレタリアの積極的な闘争の武器となり得ない」ことが問題であり、今後の課題である。ただ何よりも、多くの建築家が「観念論」に支配されていることが問題であり、「科学的」に建築を論じることが必要である。そう前置きした上で、「科学的」な例としてソ連の建築家の現状を紹介している。

なお、この号の表紙デザインも香野が担当している³⁴⁾(図1)。また、この号から「発売元」が「そろばんや書店」となっている。同書店は、香野が編集した『映画随筆』や中井正一が編集した『美・批評』の発行所でもあった³⁵⁾。香野の関心や人間関係が反映されていると言える。

5. 「改革」以前の「建築会」との違い

香野入会以前の『インターナショナル建築』でも、ソ連の建築が紹介されたことはある³⁶⁾。しかし、それは欧米各国の最新の建築の動向を紹介する特集の中で、一部として扱われたものである。またその特集では、ソ連での「インターナショナル」なる概念は政治的な意味を含んでいるが、「建築会」が用いる「インターナショナル」は意味が異なる、という主旨の注意書きがなされている³⁷⁾。

このことが象徴するように、香野入会以前の「建築会」は、意匠面や技術面に徹することで、新しい建築を目指そうとする傾向が強かった。それは1930年10月に東京で「新興建築家連盟」が結成された際の「建築会」の行動にも表れている。

「新興建築家連盟」は「科学的な社会意識のもとに」、「今日のいきつまる社会的生産関係の桎梏から建築を開放せんために、現実の科学的探究と史的発展の必然的法則の把握とによって之を实践する」ことを目指していた³⁸⁾。「今日のいきつまる社会的生産関係」とは、明らかに資本主義社会のことを指している。こうした文言から、「新興建築家連盟」は共産主義思想の影響を受けた左翼的な集団と見られ、同年11月には読売新聞によってこの連盟は「赤」の宣伝であると報じられ、すぐさま解散に追い込まれている。

「新興建築家連盟」には、本野精吾や中尾保、新名種夫、竹内芳太郎、白鳥義三郎ら「建築会」の会員も、設立と同時に会員として名を連ねていた。しかし、読売新聞の報道の頃に彼らは脱会している。そして報道の直後に発行された『インターナショナル建築』1930年12月号では、建築が階級性に基づくのは結果であり条件ではない、建築は階級性の問題やマルクス主義的な視点だけで捉えられるような「甘いものでは断じてない」とし、技術に徹することが重要であるという趣旨の論考を「編集部」の名で掲載している³⁹⁾。また

図1 『インターナショナル建築』1929年8月号(左:伊藤正文デザイン)と1932年1-3月号(右:香野雄吉デザイン)

同じ号には中尾が、建築家の職業的同盟のために「新興建築家連盟」に参加したが、「建築の階級性を云々するのは愚の骨頂」であり「社会はそれほど甘くはない」から脱退したと論じている⁴⁰⁾。

これは、世間から危険視されぬための弁明とも取れるが、実際のところ「改革」以前の「建築会」には、左翼的と言われるような傾向はほとんど見られなかった。社会的な意識や社会主義に結び付く概念が欠落していたと言ってもよい。

例えば「建築会」の理論的中心を担った伊藤正文は、「インターナショナル」と「ローカリティ」をテーマとして新しい建築のあり方を追求したが⁴¹⁾、伊藤の言う「インターナショナル」とは、科学性や合理性を意味しており、「ローカリティ」とは雨量や湿度などを指標とする計量可能な風土的特性である。そして「インターナショナル」な方法を通じて、条件としての「ローカリティ」を「解決」という形で両者は関係付けられる。そこには、科学技術への関心は見られるものの、階級社会への関心は見られない。

また「建築会」の中では最も建築や建築家の社会性について論じることの多かった新名種夫が、後に「建築会」が活動を停止せざるを得なくなった状況を振り返る文章の中で、「建築会」は「左に口を開いた赤い深淵の前に」立ち止まらざるを得なかったほど「純粋に技術的な立場において」活動したと論じている⁴²⁾。香野もまた、「建築会」への入会以前には、新名と同様に、「建築会」が技術的な立場に徹していると捉えていたようで、伊藤正文の論考を例に挙げながら、それが階級社会の分析に基づいていないことを批判していた⁴³⁾。

したがって「建築会」は、1932年1月頃の「改革」までは、共産主義思想を背景とした社会科学的な関心は見られなかったが、「改革」後は共産主義思想を背景とした社会科学的な視点によって建築を社会との関係の中で捉えようとする姿勢が強まったと言える。

この「改革」によって、「建築会」の「代表」であった上野の論調にも変化が生じている。上野は「改革」後に書いた論考の中で、昭和六次記念として建設されることになった京都市美術館を、意匠的な観点以上に社会施設の観点から批判し⁴⁴⁾、また労働者の休養のための施設として「ウィークエンド・ハウス」の必要性を説いている⁴⁵⁾。従来とは異なり、建築を社会科学的な観点から捉える論調が強くなっている。これも「改革」による変化だと言える。

また「改革」後の1932年5月には、共産主義理論に基づいた社会科学的な方法による建築の革新を目指して西山卯三が主導した京都帝国大学の学生によるグループ「デザム」が、上野を囲む座談会

を開催し、上野は香野とともに参加している⁴⁶⁾。「改革」後の上野と香野は、社会科学的なアプローチに関心を持つ建築学の学生に高い関心を持たれていたことが分かる。

6. 「建築会」の活動停止と香野

「改革」によって、香野を迎え、新たな活動を展開した「建築会」であったが、『インターナショナル建築』1933年5月号の発行を最後に、「建築会」は活動を停止している。理由は様々あるようだが、その一つは経済的な問題によるものであった⁴⁷⁾。「建築会」では、会員数が増えるに従って会費の未納者が続出し、それによる運営費の不足分を上野が負担していたようだ。だが上野の本業である建築設計の仕事が少なく、「建築会」の運営は立ち行かなくなっていたようである⁴⁸⁾。加えて上野が、来日したタウトの世話に忙しくなったことも一因として挙げられるだろう⁴⁹⁾。

「建築会」が「インターナショナル」という名称を用い、また『インターナショナル建築』の中でエスペラント語を使用したことにより、「建築会」が共産主義と深い関係があるかのように疑われたことも、活動停止の一因となったようである⁵⁰⁾。「建築会」には本務として官公庁に勤める多数の会員がいたが⁵¹⁾、1931年の満州事変の頃には、官公庁に勤める会員の勤務先にまで特別高等警察官が訪れたり、警察から呼び出しを受けたりしていたという⁵²⁾。このことは、会員の活動にも影響を与えたようであり、1931年以降、大阪市に勤務していた「建築会」の会員については、積極的な活動が減少している様子がうかがえる。

例えば大阪市の技師であり、「建築会」の理論家として中心を担った伊藤正文は、1931年に開催された「第五回建築展」には、同じく大阪市に技師として在籍する会員であった新名種夫とともに、作品を出品していない⁵³⁾。また伊藤は、『インターナショナル建築』の編集委員も担っていたが、1931年9月号をもってその役割を中西六郎に交代している⁵⁴⁾。「建築会」の活動費が集まらなかったのは、「建築会」が左翼的な団体と世間から理解されたことで、会員がその活動から離れたことが原因になっていたとも考えられる。

そして香野もまた、次のような経緯から、1932年秋頃から1933年5月頃の間、「建築会」の活動から離れたと見られる。香野が「建築会」に入会して最初に編集を担当した『インターナショナル建築』1932年1-3月号の次号に当たる、1932年8月に発行された1932年4-7月号は、やはり香野が編集を担当している。この号では、前号に引き続く特集として、ドイツの標準化住宅が紹介されている。だが、その後しばらく『インターナショナル建築』の発行は途絶え、1933年5月になってようやく発行された次号には、編集者としても執筆者としても、香野の名前は見当たらない。1933年5月号は、日本への旅の途上にあったブルーノ・タウトからの手紙が紹介され、結果的に最終号となったものである。前号の1932年4-7月号では、次号のテーマとして、再びドイツの標準住宅や都市計画が予告されているが、その該当号として発行された1933年5月号の内容は、予告とは全く異なっている上、発行までのブランクが大きい。したがって1932年8月から1933年5月頃までの間に、香野は「建築会」の活動から離れたと見られる。その理由は定かではない。しかし香野の入会を始めた「改革」によって、「建築会」は共産主義理論に基づいた建築を追求する傾向が強まり、従来以上に警察によ

る取り締まりが厳しくなったことが、理由として考えられる。香野は「改革」後の「建築会」の中心的存在であったため、「建築会」から離れざるを得なくなった可能性が高い。

その後香野は、1933年6月に警察によって検挙され⁵⁵⁾、1934年2月まで拘留されている。前出の湯浅芳子から依頼されてカンパ集めに協力していたことにより、共産党と関わりがあると見なされ、治安維持法違反として検挙されたのだという⁵⁶⁾。この検挙は「建築会」の活動と直接的な関係はないようだが、これ以降、香野は完全に「建築会」の活動から離れることになる。そして同時に、「建築会」は活動を停止したのだった。「建築会」が「改革」を実行し、新たな活動を展開していた矢先に、中心を担っていた香野が「建築会」の活動から完全に離れてしまったことも、「建築会」の活動停止の一因になったと考えられる。

7. おわりに

以上から、次のことが明らかになった。

香野雄吉は京都帝国大学建築学科に学んだが、学生時代からソ連の映画理論の影響を受け、映画評論の雑誌を編集するなどした。その後松竹京都撮影所に勤務しながら、1929年からは共産主義理論に基づいた社会科学的な視点からの建築評論も行なった。そして香野は1932年1月頃の「建築会」に入会する。ちょうどこの頃、「建築会」の上野伊三郎と本野精吾が「ソヴェート友の会京都支部」の幹部に就任するとともに、「建築会」で「改革」が行われていた。

香野は、「建築会」入会直後から機関誌『インターナショナル建築』の編集を担当し、ソ連の建築を紹介し、また社会科学的な視点から新しい建築のあり方を提唱した。「建築会」は従来、意匠面や技術面に徹することで、新しい建築を目指す傾向が強かったが、共産主義理論に基づいた社会科学的な視点から新しい建築を目指す団体に変化したと言える。「建築会」の「改革」によって、「建築会」と香野が理念を共有したことによって、香野の入会に至ったと見られる。香野の入会は「改革」の一環であり、香野は新しい「建築会」のあり方に大きな影響を与えたと言える。

しかしその後、経済的な問題や警察から左翼的な団体と見られたことなどが原因となり、1933年5月の機関誌の発行をもって「建築会」は活動を停止する。香野も同時期までに、「建築会」の活動から離れたと見られる。そして同年6月に香野は警察に検挙される。「改革」の中心を担った香野が「建築会」を離れたことも、「建築会」の活動停止の一因になったと考えられる。つまり、香野の「建築会」からの離脱は、「建築会」の終焉に大きな影響をもたらしたと言える。

このように、香野は「建築会」の「改革」と終焉に大きな影響を与えた人物であった。

後に上野伊三郎は、「建築会」が「インターナショナル」という名称のせいで、共産党と関わりのある、あるいは共産主義を目指す団体と捉えられるという「誤解」を生み、それが原因の一つとなって「建築会」は終焉を迎えたとしている⁵⁷⁾。しかし本稿で考察してきたように、「建築会」は積極的に内容の「改革」を行ない、新しく入会した香野に機関誌の編集を担わせることによって、共産主義理論に基づいた社会科学的な方法によって、新しい建築のあり方を目指すようになったのであり、単なる「誤解」が「建築会」の活動に終焉をもたらしたとは言い難い。それが「誤解」であったとしても、

本稿が明らかにした「建築会」の「改革」後の様子を見れば、そのように「誤解」されても仕方がなかったと言えるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたり、以下の方々から、資料の提供や閲覧においてご協力いただきました。加納宗子氏。ユニ通信社笹尾純氏。日本映画データベース野村裕介氏。東京国立近代美術館フィルムセンター入江良郎氏。京都国立近代美術館山野英嗣氏。ここに記して感謝いたします。

注

- 1) 川添登「国際主義運動の挫折」、『現代建築を創るもの』、彰国社、1958年、p.87-95
- 2) 牧野守「京都 1930 年代の群像・1～11－記録映画の理論的動向を追って・41～51」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1978 年 6 月 19 日・22 日・26 日・7 月 6 日・27 日・31 日・8 月 3 日・7 日・10 日・14 日・17 日、牧野守「加納龍一プロフィール・1～10」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 3 月 12 日・15 日・19 日・22 日・26 日・29 日・4 月 2 日・5 月 7 日・14 日・21 日、牧野守「香野雄吉の映画と建築についての論考」、『映像学』vol.41、1990 年 6 月、牧野守『『現代住宅建築論』解説－モダニズムの光のなかに消えた影像－』、『現代住宅建築論』（香野雄吉著、復刻版）、ゆまに書房、1991 年、などがある。
- 3) 佐々木宏『巨匠への憧憬－ル・コルビュジエに魅せられた日本の建築家たち－』、相模書房、2000 年、pp.399-404
- 4) 前掲 1) 川添登「国際主義運動の挫折」、p.90
- 5) 香野の略年譜は、香野の息女、加納宗子氏から提供いただいた『加納龍一略年譜』（私家版、1988 年）を中心に、建築や映画関係の諸資料を用いて、建築に関連することを中心に筆者が作成した。この他に膨大な映画関係の功績があるが、ここでは省略している。
- 6) 牧野守「香野雄吉の映画と建築についての論考」、『映像学』vol.41、1990 年 6 月、pp.12-13
- 7) 『映画随筆』は、1929 年 1 月発行の第 4 巻第 3 号までは現物が確認できたが、最終的にいつまで発行が続いたのかは確認できていない。
- 8) 香野雄吉「ソヴェート映画『トゥルクシブ』」、『映画科学芸術』第 1 集、1931 年 6 月、p.57
- 9) 加納龍一「1930 年代をふりかえって・1」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1977 年 9 月 5 日
- 10) 加納龍一「自叙伝と他叙伝・3」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 4 月 23 日
- 11) 加納龍一「自叙伝と他叙伝・4」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 4 月 26 日
- 12) 『加納龍一略年譜』では「中退」とは明記されていないが、京都大学建築学科の関係者が「中退した」と述べていること（『京都大学工学部建築学教室六十年史』、1980 年、pp.249-250）、また京都大学建築学科の同窓会名簿に掲載されていないことなどから（『京大建築会会報』VOL.64、京大建築会、1999 年）、「中退」と判断できる。
- 13) 『日本映画 200』（キネマ旬報増刊）、キネマ旬報社、1982 年 5 月、及び、『フィルムセンター所蔵映画目録 日本劇映画』、東京国立近代美術館フィルムセンター、1986 年、を参照した。
- 14) 加納龍一「自叙伝と他叙伝・5」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 6 月 4 日、および、東京国立近代美術館フィルムセンターが所蔵する衣笠貞之助助蔵資料のヨーロッパ滞在中の衣笠宛の香野の書簡を参照。
- 15) 加納龍一「自叙伝と他叙伝・6」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 6 月 21 日
- 16) 香野雄吉「建築と機械」、『思想』1929 年 8 月号、岩波書店
- 17) 前掲 15) 加納龍一「自叙伝と他叙伝・6」
- 18) 『新興藝術』誌には、「建築の工業化」1929 年 11 月号、「新ロシアの建築」1929 年 12 月号、「国際的建築へ」1930 年 1 月号、が掲載された。その他『建築時代』に、「中央建築・工芸研究所としてのパウハウス」1929 年 11 月号、が掲載された。
- 19) 加納龍一「1930 年代をふりかえって・2」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 9 月 8 日
- 20) 香野雄吉『現代住宅建築論』、天人社、1930 年（1991 年に、ゆまに書房から再刊されている）
- 21) 香野雄吉「現代と建築」、『現代住宅建築論』、天人社、1930 年

- 22) 香野雄吉「新ロシアの建築」、『現代住宅建築論』、天人社、1930 年
- 23) 香野雄吉「国際的建築へ」、『現代住宅建築論』、天人社、1930 年
- 24) 西山卯三『建築学入門－生活空間の探究（上）』、勁草書房、1983 年、pp.132-135
- 25) 「編集室から」、『インターナショナル建築』1932 年 1-3 月号、p.28
- 26) 前掲 11) 加納龍一「自叙伝と他叙伝・4」
- 27) 「人人の言葉」、『インターナショナル建築』1931 年 5 月号、p.3
- 28) 「編集室から」、『インターナショナル建築』1932 年 1-3 月号、p.28
- 29) 前掲 25) 「編集室から」、p.28
- 30) 牧野守「香野雄吉の映画と建築についての論考」、『映像学』vol.41、1990 年 6 月、p.6、牧野は「ソヴェートの友の会京都支部」の設立は 1931 年 1 月だとしているが、正しくは 1932 年 1 月である。
- 31) 山内年彦「ソビエト友の会の歴史」、『日本とソビエト』第 589 号（京都版）、日ソ協会京都府連合会、1978 年 1 月 1 日、p.5
- 32) 香野雄吉「ソヴェートの建築家」、『インターナショナル建築』1932 年 1-3 月号、pp.11-12
- 33) 湯浅芳子「ソヴェートの日常生活」、『インターナショナル建築』1932 年 1-3 月号、pp.13-14
- 34) 後に香野が、この号では「原稿、挿絵、表紙、すべて一任された」と振り返っている。加納龍一「自叙伝と他叙伝・4」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1984 年 4 月 26 日。図版の機関誌は、京都国立近代美術館所蔵。
- 35) 加納龍一「京都 1930 年代の群像・8」、『ユニ通信』、ユニ通信社、1978 年 8 月 7 日
- 36) 『インターナショナル建築』1931 年 6 月号
- 37) 「ロシアに於ける新建築」、『インターナショナル建築』1931 年 6 月号
- 38) 松井昭光監修・本多昭一著『近代日本建築運動史』、ドメス出版、2003 年、p.37
- 39) 編集部「同じ言葉」、『インターナショナル建築』1930 年 12 月号、p.22
- 40) 中尾保「余の新興建築家連盟を脱退した理由」、『インターナショナル建築』1930 年 12 月号、p.22
- 41) 笠原一人「『日本インターナショナル建築会』における伊藤正文の活動と建築理念について」、『日本建築学会計画系論文集』第 566 号、日本建築学会、2003 年 4 月、pp.153-159
- 42) 新名種夫「その時代に就いて－日本インターナショナル建築会の時代的背景－」、『建築と社会』1937 年 6 月号、p.29
- 43) 前掲 23) 香野雄吉「国際的建築へ」、p.123
- 44) 上野伊三郎「一つの建築病－記念建築について－」、『インターナショナル建築』1932 年 1-3 月号、p.27
- 45) 上野伊三郎「ウィークエンド・ハウス」、『インターナショナル建築』1932 年 4-7 月号、p.11
- 46) 前掲 24) 西山卯三『建築学入門－生活空間の探究（上）』、p.135
- 47) 中西六郎「インターナショナル建築運動」、『建築と社会』1958 年 1 月号、p.77
- 48) 「建築会」会員だった竹内芳太郎へのインタビュー（1987 年）による。久保田正一『日本インターナショナル建築会について』（京都大学修士論文）、私家版、1988 年、p.86～87、参照。また B.タウト『日本－タウトの日記－』、岩波書店、1975 年、からも上野が経済的な問題を抱えていたことが分かる。
- 49) B.タウト『日本－タウトの日記（全 3 巻）』岩波書店、1975 年
- 50) 上野伊三郎・本多正道・星広文ほか「上方こんじょう」、『ひろば』1964 年 5 月号、p.16-18、および、上野伊三郎「日本インターナショナル建築会」、『建築と社会』1961 年 12 月号、p.43
- 51) 大阪市建築課に属していたのは、判明しているだけでも、伊藤や新名のほか、富士岡重一、本多正道、川口一、八尋丹三、宮田秀穂、桐本楠雄、海上静一など、25 名にものぼる。「日本インターナショナル建築会会員」、『インターナショナル建築』1930 年 2 月号、p.29-30、および、川島智生『近代日本における小学校建築の研究』、京都工芸繊維大学博士論文、1998 年、を参照のこと。
- 52) 前掲 50) 上野伊三郎「日本インターナショナル建築会」、p.43
- 53) 「第五回建築展覧会後記 出品目録」、『インターナショナル建築』1931 年 10～12 月号、p.24～25
- 54) 「日本インターナショナル建築会記事」、『インターナショナル建築』1931 年 10～12 月号、p.28
- 55) 『加納龍一略年譜』、私家版、1988 年
- 56) 香野雄吉（加納龍一）の息女、加納宗子氏への筆者のインタビュー（2007 年 8 月）による。
- 57) 前掲 50) 上野伊三郎「日本インターナショナル建築会」、p.43

（2009 年 1 月 30 日原稿受理、2009 年 7 月 1 日採用決定）